

少年犯罪被害者になって

岡田 行雄

法学部教授

山口 由美子

西鉄高速バス・バスジャック

事件被害者

山口…皆さん、こんにちは。初めまして。先ほど、岡田先生から紹介していただきました、西鉄高速バスジャック事件の被害者の一人で、山口由美子と言います。おそらく学生の皆さんは、もう二〇年ぐらい前のことなので、ご存じないと思いますけれども、今日は、その当時のことを、「少年犯罪被害者になって」という題でお話しさせていただきます。

まず、今日のお話は、事件当日のことや私が受けた様々な被

害のことだけでなく、私が加害少年の両親から謝罪をもらったこと、直接少年とも面会したこと、その後は、いろいろな少年刑務所や少年院で講話もさせてもらったことなども含めた内容となります。よろしくお願います。

それでは、事件当日のことから話したいと思います。先程紹介してもらったように、一九九〇年五月三日に佐賀駅バスセンター発の福岡・天神行の高速バスが一七歳の少年

によって乗っ取られました。この事件で一人が亡くなって、三人が重軽傷を負ったんですけれども、亡くなられた塚本さんという方と一緒に私はバスに乗っていました。天神でのコンサートに行こうという約束だったんですね。バスに乗って、いろんな話を楽しんでいたら、高速道路に入っしてしばらくしたときに、一番前に座ってた少年が突然立ち上がり、牛刀をふりかざして「このバスは俺が乗っ取った。荷物を置いて後ろに行け」と言いました。

全然凄みはなく、『なんでこの子がこんなこと言ってるんだろ』と感じたんですが、他の乗客全員後ろに下がられたので、私たちの前方に乗っていた一人旅と思しき少女に、「一緒に下がろう」と声をかけたんですが、少年から「この子は前に置いとけ」と言われ、仕方なく私たちだけ後ろに移動しました。そして、通路側が危ないと思い、塚本さんを窓側に、私が通路側に座りました。そして、少年に対して、本当に凄みがなかったのので、本気でやっているということが私には伝わらず、彼が辛いんだと感じていました。

そうこうしているうちに、一人だけ居眠りをして後ろに下がってない乗客がいることに少年が気づいたときに、「お前は俺の言うことを聞いてない、後ろに下がってない」と言ってる方が後ろに下がられた途端、その方の首を刺しました。そのとき初めて、本気だったことに気づいたのですが、『本気で人を殺したいとか傷つけたいかと思って生きてる子どもはいな

い』という思いが私の中であって、『今の少年の心は本来の心ではない。少年本来の心に戻ってほしい』という気持ちを少年に送りました。加えて、『戻ってほしい』と祈るような気持ちで向き合っていたんです。

しばらくして、運転手さんが「トイレ休憩も必要じゃないか」と声をかけて下さり、少年もそれには応じました。そして、「駐車場ではない、道路の路肩に止めろ」との少年の指示で路肩にバスが止められ、少年が「トイレに行きたい者?」と声をかけて、一人目の方が降りられました。運転手さんは、高速道路にある緊急電話のところに少年には見えないような形で止めて下さったので、降りた方はすぐ電話をかけた行かれたようです。窓のカーテンも少年の指示で全部閉められていたので、外で何が起こっているのか見えなかったのですけれども、高速道路の路肩に高速バスが止まっていて、緊急電話をかけている人がいるのを不審に思った乗用車がバスの前に何台か止まり始めました。

それを見た少年は、慌てて、「バスを早く出せ」と言っていて、持っていた牛刀をバスの運転手さんに振りかざしたのです。そこで、運転手さんは仕方なくバスを出発させました。それを確認した少年は後ろにきました。塚本さんはリュウマチというご病気だったので、バスの前の方に座っていて、私たちは後ろに下がった人たちの中でも前の方に座っていました。そこに、少年が私の前に立ち止まり、「あいつは裏切った。連帯責任です」

という言葉と共に私に切りかかりました。私は少年によってい
ろんなところを切られて、座席に座っていられなくなり、下に
転がり落ちて通路に座り込みました。自分の周りは自分の血で
いっぱいになりました。後日、「痛かったでしょう」と言われ
るんですけども、全然痛くなかったんですね。ただ、切られ
たというのを感じていただけでした。それとは別に、『少年の
心はこの私の傷と同じくらい傷ついていたんだ』ということ
を感じました。そして、『そういう少年を殺人者にするわけには
いかない』という思いが、なぜか自分の中から湧き起こり、傷
の浅かった右手で自分の身体を支え、傷の深かった左手は自分
の心臓より高い場所にあつた座席の肘掛けに置いたんです。無
意識にそうしていました。そして、死んではいけないと思いな
がら座っていましたが、かなりの出血で意識が朦朧となり、『こ
のまま死んでしまうんだなあ』とも思いました。本当に生死が
同じ線上にあつたと思います。以前に、臨死体験という本を読
んだことがあつて、それには、光に吸い込まれていくようだ
とか、すごく気持ちがいいとか書いてあつたんですけども、正
しくそんな感じだったですね。本当にすうーっと光に吸い込ま
れていくような、『死んだらいけない』と思いがら、このまま
死んでしまうんだなあ』と。あの時倒れていたら、失血死して
いたと思います。『ただ少年を殺人者にしたくないと思つたこ
とが、逆に自分の命を守つたなあ』と、後でそういうことも考
えました。

その後、私の意識が無いときに、乗客が窓から二人逃げられ
たみたいで、私の横の塚本さんが二回刺されたようでした。意
識が無いので、それも気づかないでいたんですけども。その
前に、私が通路にしゃがみ込んでいるのが目障りだったみたい
で、少年から「おばさん、邪魔だからどけ！」と言われて、他
の乗客の方が、私を足元に引き入れて下さつたんですね。通路
にいたら、いつまた刺されるだろうという思いもあつたので、
非常に心が安定しました。そして、その引き入れて下さつた
方に、少年は「次、乗客が逃げたら、お前の番だ」と言つたよ
うです。この方は友達と一緒に乗っていたようで、もう一方
が「見張りに立たせてください」と言つて二〇歳前後の女性が
立ってくれました。その立ってくれた女性に、少年は「なんか
欲しいものはあるか」と聞いたそうです。そこで、その方は、
乗客全員のことを考えて、食べ物や飲み物、それから簡易トイ
レ、加えて、五月といつてもまだ夜は寒いので、毛布を要求し
てくれました。その後、少年は警察とのやりとりの中で、それ
らを要求したので、その差し入れがあつたんですね。次はお前
の番だつて言われた女性も一緒に立つて、差し入れられた品々
を配ってくれたようです。

実は、この話は、事件から一五年ぐらい後、つまり、今から
四、五年ぐらい前にその女性と会うチャンスがあつて、そのと
きに聞いたものです。そうでなければ、私は意識がなくて、わ
かつていなかったんですから。でも、その女性がなぜそういう

ことを言えただろうと思つて、その時、どうしてそんなことが言えるほど冷静にできたのかと尋ねたところ、「大きな事件とか扱ふ小説が好きで、そういう小説をたくさん読んできたから、意外と事件を起こす側の気持ちとかが少し理解できていたから、そのように動けたのかな」とおっしゃったんですね。

さて、その後、広島でやつとバスが止められ、ケガ人だけでも出してこれという少年への要求に対して、少年は「ピストルに弾一発入れて持つてこい」と言ったそうです。警察の方は時間をかけて丁寧な、ピストルは渡せない、ということの説明して、少年はそれに応じて、それでは防弾チョッキを持つて来るようにと要求を変えたそうです。そこで、防弾チョッキがすぐに少年に手渡されたのですが、少年はインターネットで色々調べていたようで、「これは偽物だから、本物を持つてこい」と突っ返しました。ピストルに弾一発入れて持つてこいというのは、ひよつとしたら、自殺しようと思つていたのかもしれない。防弾チョッキに要求を変えたのは、人から殺されたくないの思いかもしれません。事件を起こして、人を刺す、自殺する、本当に彼も追い詰められてどっちでもいい状況を生きていたのではないかな、と私なりに考えました。

そして、警察の方は防弾チョッキを取りに行かれたんですが、かなりの時間待たされました。それは、高速道路でバスが停車できる場所は意外と都心部から離れているからです。少年もイライラしていたと思います。立つてくれた女性が、警察の

方に向かって「中にはケガ人がいるんだから、防弾チョッキ早く持つてきて！」と叫んでくれました。そのとき、少年は「おい、あんたんこと言う人好いとう」（僕はあなたのように言う人が好きです）と言ったそうです。そういう会話があり、やつと防弾チョッキが手渡されて、私はそのとき意識が少しあつて、「これで助け出される」と思った瞬間、少年が、私が自分の力で座り込んでいるのが癪に障ったのでしよう、「こいつしぶといなあ、殺してやろうか」と最後に言いました。そのときも立つてくれた女性が一言、「もう、よかやんねー」（もう、いいですよ）と言つてくれて、その一言で少年は気持ちをおさめてくれました。

窓からでしたが、他の乗客に抱えてもらいながら私がバスから救急隊員の手へ渡された瞬間、「助かった」と思いました。ただ、それだけでした。他の乗客は大丈夫だろうかとかそんなことを考えるゆとりは一切ありません。自分のことだけでした。この間に乗客の二人が逃げられたと言いましたが、事件後、逃げた二人の乗客に対して、もの凄いい誹謗中傷があり、「お前らが逃げたら誰か殺されるってことがわかってたんじゃなにか」と責められて、仕事を続けられなかったりとか、引越されたりした方がいらつしゃったようです。お見舞いに来てくれた私の友達も、「逃げたら誰かが殺されるってわかっているでしょうに、卑怯だよ」と言いました。そこで、「あなたはバスに乗つてそういう状況に遭つたことないでしょう。ああいう時つて自

分のことしか考えられないのよ。だから逃げようと、なにしようかと、みんなが同じ被害者だと私は思っている」とその友達には伝えました。

結果的に私たち三人の怪我人は、無事に助け出され、病院に救急車で運ばれました。後に、他の乗客は次のインターチェンジでSATという警察の特殊部隊がバス内に入って無事に全員助け出されて、少年が逮捕されたということを知りました。

警察は、突入の前に説得を試みられたようですが、少年は精神科の病院に保護入院させられていたのですが、専門的な知見が必要だろうと、まず、その精神科の医師が説得に当たられたのに対して、少年は逆上してしまったそうです。後に、お目にかかった少年の両親によれば、「私たちもあの時、説得しなかったけれども、それもさせてもらえなかった」とお聞きしました。ともかく、警察の突入で一応この事件は終わりました。

でも、どうして少年がそういう事件を起こさなければいけないかだったんだろうか、と私なりに考えました。新聞報道でいろんなことが書かれていて、両親の手記も出ました。それらを踏まえて私なりの考えをまとめたものを話したいと思います。

この少年は、小学校高学年で学校があまりおもしろくなくなり、中学校に入り、ひどいじめにあっていたそうです。佐賀市の教育委員会は、いじめはなかったと報道で言っています。が、明らかにいじめはありました。事件の話を求められるままいろいろな場所で話していますが、ある時、講演が終わった後に、

少年が通っていた中学校の先生だったという人が寄って来られて、「あのとき学校で彼へのいじめはありました。でも、学校でどうすることもできないまま卒業させてしまいました」と涙ながらに話してくださいました。本当は、「どうして、そうしかなかったのですか？」と聞きたかったのですが、一人の教師ではいろんなことができないというのも現実かなとも思っています。ともかく、中学校でひどいじめを受け、決定的な事件として、音楽室に忘れた筆箱をいじめた側から取り上げられ、「これが欲しいならここから跳んでみる」と言われ、ある踊り場から無理矢理跳ばされたそうです。そこはよく中学校の生徒達が跳んでいる場所だったと新聞報道に出ていましたが、普通跳ぶ子っているのは、そういう経験もあって、大丈夫だという気持ちで跳ぶ子がほとんどだと思います。でも、あの少年は、運動神経が鈍くて、普通はそういうことはやらない子だったと思いますが、無理矢理跳ばされて、腰を圧迫骨折してしまいました。入院を余儀なくされ、入院先での高校受験だったようです。結果は、佐賀では難関と言われる高校に無事合格したんですが、一週間かそこらで高校に通えなくなり、不登校、そこから引きこもりが始まったそうです。

親としては、いじめられていたことはご存じだったようで、この子の心の闇をどうにかしてあげたい、そういう思いでいろんな相談機関を回られたようですが、少年はそういうところには行きたくなかったようで、頑として行かなかったそうです。

学校にも通えないみじめな自分がいつ親から見捨てられるだろうか、そういう思いで少年は生きていたのではないかと思えます。そこで、あの中学校でいじめさえなければという思いが出てきて、中学校襲撃を計画していたそうです。それを両親が知るところとなり、そういうことだけはさせてはいけない、そういう思いで、ある有名な精神科のお医者さんに相談をされ、警察も関与して精神科の病院に医療保護入院させられました。両親は、親としてやれることをやったという思いだったでしょう。しかし、少年としては、入院したくないのに、無理矢理入院をさせられ、やはり見捨てられたという気持ちがあつたのかなあと思います。入院先で両親と別れるときに少年は「覚えていroy」と言ったそうです。その後、両親が面会に行く度に非常に暴れていたんですね。会いたくないという気持ちで。そして、早く退院したいという思いから、県に退院願いを出すと退院できるということも知っていたようで、そういうことも行っていました。それを知った精神科のお医者さんは、少年に対して「面会の時、いつまでも暴れていたら退院できないよ」という指導があり、少年はいい子の仮面を被ったと思います。その結果、両親との面会のときも、普通に会話する少年となり、その様子を見て、精神科のお医者さんは、「ああ、これだったら大丈夫かな」という判断をされ、一泊の外泊が許された、その時に少年はあの事件を起こしてしまいました。

精神科の病院で、少年のこれまでつらかったこととかを誰か

が聞いてくれていたら、事件は起きなかったかもしれないなあ。入院する前に、親でもいい、友達でもいい、先生でもいい、誰かが彼の話を共有していたら、事件は起きなかったかもしれないなあ、私は本当にそう思うんですね。

それはどうしてかという、私の娘も不登校の経験があつたからです。実は、この事件のことを話すのに、娘に聞きました。「あなたの不登校のこと、話していい？話してほしくないんだつたら、お母さんはこの事件について一切話さないから。」普通の被害者の人は、人を殺したら極刑だよ、死刑だよ、としか言わない。恨むしかない。そういう状況の中、私は娘の不登校を経験していたことで、少年がつらいと受け入れることができたのではないかと思います。

小学校のときと中学校のときと二回経験したんですけれども、小学校のときは行かなくていいよと、娘の不登校を受け入れることができたので、学校に居場所がなくても家庭には居場所がありました。だから回復していたと思います。そして、「私はいじめられて、心が針みたいに細くなつた。でも、もう太つたから大丈夫。」そう言って、学校に通い始めました。

こうして小学校では復帰したんですけど、中学になって、学級委員になって帰ってきてから、またひどいじめが始まりました。中学校の家庭訪問のときに、「小学校で不登校した子が、中学で学級委員なんかできるはずなのに、『誰も引き受ける人がいなかったから、私仕方なく引き受けてきたよ』」と言って

帰って来ました。先生、フォローをよろしくお願いします」と伝えたんですけれども。中学校では、担任といえども、担当教科の時間だけしか関わりませんから、中々フォローができないまま、もつとひどいじめがあつたそうです。娘はいじめを受けやすい子だったのかもしれない。でも、その子に責任はないですね。いじめめる子がストレスを抱えて、いじめやすい子に何かとストレスを発散している。私はそんな風に考えています。こうして、娘はまた学校に通えなくなりました。でも、小学校のときは「行かなくてもいいよ」と受け入れた私だったんですが、中学で不登校したときは、「中学になってまで甘えるの？高校受験もあるのに勉強はどうするの？」と、不安・不満があつて娘の不登校を受け入れられない私がいきました。学校に居場所がない、家庭にも居場所がない。そういう娘はどんどん疲弊していきました。小学校の時と同じようにゲームやつている後ろ姿が、全然違うんですね。本当につらく、愛情を感じさせない、そういう娘の後ろ姿を見ていて、少年が包丁を振りかざした時の姿と、どこかで自分のなかでオーバーラップしたのかな、だから彼がつらいんだと共感できたのかもしれない、と思いました。これは、後付けです。正直なところ、わかりません。でも、自分なりに納得するためにそういう風に考えました。その上で、娘に聞いたんですね。「あなたの不登校のこと話さないでは、この事件について話せないと思う」と。娘は、しばらく考えて、「話していいよ」と答えてくれました。娘が話

してほしくないと行っていたら、この事件について話す私はいませんでした。やはり、子どもを守るのは親しかいないという気持ちがあつて、子どもの気持ちを最優先にしたいと思つていましたから。娘は、「私はいろんな人に話を聞いてもらつたからよかつた。あの少年は誰からも話を聞いてもらえず、つらかつたと思うよ。だから話していいよ」と言ってくれました。そして、「話を聞いてもらうだけでいい、答えは自分で出すから」と。ここが、大人として一番難しいところだなあと思うんですね。確かに、最初は黙つて話を聞いているのですが、いろんな話を聞いているうちに、ついつい、私は、「ああしたら、こうしたら」と、上から目線で言つてしまうところがあるというのを、何度も娘から指摘されました。ただ聴くことが大事であつて、答えは本人が持っているんだという信頼関係を子どもと築くまでに、多くの時間が必要でした。

こうして、娘の不登校の経験があつたから、この少年をこんな風に受け入れられたのかもしれないなあと思つています。

退院してしばらくして、少年の両親から謝罪の手紙が届きました。その中に「ほんとうに申し訳ありませんでした。直接会つて謝りたい」と書いてあり、その後突然、謝罪に來られました。私は少年だけが悪いわけではなく、環境が問題だという思いがあります。少年の親だけで彼が育つたわけではない、学校の先生や友達・近所の人々などいろいろな周りの人の影響を受けて育つて来たと思つています。でも、一番近い家族からは謝つて

ほしいという思いがありました。

実際に少年の両親が謝りに来てくださったときは、戸惑いと嬉しさを会いましたが、まず、責めました。「どうしてこういう結果になったんですか」と。「うちの子も不登校でした。親しいじゃないじゃないですか、子ども守れるのは。」私も不登校の親だったということで、泣きながら、共感しながら責めました。両親はいろんな話をされました。それを聞きながら、そういう事情があったんだなあとは思いました。ただ、家族としてはちゃんと向き合ってほしいなあという思いもあり、実際、少年が今どういう状況にあるのかということを知りたかったので、「よかったら時々会いに来てください」とお願いをしました。

次に両親が来られたときに、お父さんは息子が殺人者になったことで、仕事を辞めさせられ、誰からも電話が入らなくなっただけの話がされました。『孤独』ということを感じられたんですね。少年に面会に行ったときに、「お前も孤独だったんだな。つらかったね。」と話されたようで、少年はそれまで食欲もなかったようですが、顔の表情が少し緩んで、「お父さん、これからご飯食べるから」と言ってくれた旨伝えてもらいました。親がそうした子どもの気持ち共感しようという立場に立つことが本当に大切だと、教えてもらった気もしました。

次に、少年との話に入る前に、広島島の病院でのことを話したいと思います。私はバスから救出され、救急車で運ばれている

時「もう一人の人は亡くなったみたいだな」と救急隊員の方が話されていました。「ああ、塚本さんは亡くなられたんだ」とわかったんですけど、感情は一切動きませんでした。情報だけが私の身体をすり抜けていきました。本当に大変な状況に遭ったとき、「感情には蓋がされるのかな」と後で考えました。救急車が病院に着き、見ず知らずの方からたくさん血をいただき、長時間にわたる手術をしてもらって、意識が戻ったときに、身体がものすごくきつかったです。あまりのつらさに「あのとき死んじけよかったです。塚本さんよかったです」と正直思いました。そして、少しずつ元気になっていくにしたがつて、自分が生きてるのがつらくなりました。一緒にいた塚本さんが亡くなられ、自分だけ生き残ったことが塚本さんやそのご遺族に対して、申し訳ないという思いでした。夫は仕事を休んで広島まで来て、付き添ってくれました。

私には三人の子どもがいて当時一番上の子どもが一八歳で、高校を卒業したばかりでした。新聞奨学生として下宿しながら、福岡の専門学校に通っていました。不登校をした真ん中の娘は、佐賀の高校を受験できなくて、福岡の定時制高校に下宿しながら通っていました。そして、高校に入ったばかりだった次男が一番大変だったと思います。家に両親や兄姉もいない。入学したばかりの高校で、まだ友達もできていません。さらに、夫婦とも広島に居るので、夫の弟が次男を快く引き受けてくれたので、弟の家から高校に通っていたのです。

私は病院で寝ている状況の中、夫は私に「家族もお前が居なくても頑張っているぞ、だからお前も頑張れ」と言ってきました。やっと命と縁をもらっている状況の中で、それ以上頑張れないですよ。寝ているのがやっと。でも、夫が悪いわけではない。日本人って「頑張れ」って言葉が好きなんだと思います。しかし、私はみんなそれぞれ生きている状態が、頑張っている状態だと思っています。だから私は、「頑張れ」って言葉があまり好きではないです。「頑張ってるね」はいいけれども。

そういう中で、精神科のお医者さんが来られて「大変だったですねー、お辛かったですよ」と言ってきました。実は、それまで自分がどういう状況にいるのか、私はよくわかっていなかったんです。バスの中の状況を皆さんにお話ししましたが、目からの情報だけなんです、感情が一切動いてない。そういう中で「辛い状況だったね」と言ってもらって初めて、『あつ、辛い状況を生きていたんだ』ということが自分の中でわかったというか、頭で理解できたというか、それまで瞼の裏には、自分から流れた血を見て、その血の色が張り付いている感じでしたが、その言葉で少しずつ薄らいでいって、ピンク色に変わっていきました。その時その人に必要な言葉をかける言葉のことを言葉と呼ぶのですが、まさしく魂を揺り動かしてくださいだった言葉だったなと思います。そういう言葉って本当に大切だなと思いました。その人の感情をもう一度修復するということを感じます。そうやっていろんな人に助けてもらいました。

ただ、自分が生きていることが辛いと思っていた時、夫が（塚本さんの）ご遺族に電話をかけてくれました。息子さんが出られ、「山口さんだけでも生きてよかったです、よかったです」と、心から言ってくださる言葉が、次に生きていく力となりました。看護師さんからも、すごく大切にしてもらったんです。相手が大切にしているというのではなくて、私が大切にされると感じる看護をしてもらったんです。そんな風に大切にされる経験で、私の中で変わっていったことがありました。それは、それまでの私は、頑張ってる自分は良い、頑張らない自分はダメなんだ、そう思って生きてきました。でも、私には頑張れないときもあり、そういう時、一日過ごした後には、『はー、今日はだめな私だったなあ』と落ち込む私がありました。でも、人って、頑張っているときと頑張ら（れ）ないときもどちらも自分なんですよね。だから、自分を丸ごとって言うんですか、何も出来ない私をこんなに大切にしていただいてありがたいなと思うと同時に、『大丈夫なんだ』と、なんとなくそう思えたんですね。それまで、頑張らない人を見た時、ダメな人だなと思っていた私がいまですが、そう思う私は本当に傲慢だったなあということに気づきました。やはり、生きているということは、それだけですごいことですし、命があることがすごいことだということ、病院にいるときに感じたんですね。でも、これは頭を通してないものですから、よくわかっていませんでした。

一か月余りの入院の間に、執刀医の先生は、「この指感じま

すか？」と毎日様子を病室まで来てくださいました。先生は、手術の結果を心配してだったのか、私に安心を与えようと思われてなのか、その辺はわかりませんが、休みの日は普段着で来てくださいました。本当に大切にしていたのだなあとという気持ちがありました。そんな時に、その先生から「良かったらリハビリも広島でしていただけませんか」との願いがありました。私は家族のことが気になっていて、「リハビリは佐賀でもできる」とお聞きして、帰ることにしました。

それまで当たり前だと思っていた家族が、当たり前ではなかったんですね。一か月入院して家族から距離を置いたことで、子どもたちがいたから私は何とか生き延びて来たと、そして、家族がいたい存在だったということに改めて気づかせてもらいました。そして、これまで、子どもたちの言いたいことも聞かずに、自分の言いたいこと、思っていることを子どもたちに言い続けて、つらい思いをさせてきたと、正直なところ思っています。

半月余りのリハビリで何とか自分で自分のことが出来るようになった時に我が家に戻ってきました。戻って来ても一日中休んでいて、家のことは何もできません。でも、お母さんがいてくれるだけでいいと、子どもたちは喜んでくれました。一緒に暮らしていくうちに、子どもたちが以前より明るく元気に変わって来ていることに気づきました。それで、母親が生死の境にいたことで、「あなたたちも大変だったね。そういうトラウ

マから解放されて元気になってくれてお母さんも安心した」と言いましたら、「お母さん、違うよ。お母さんが変わったから」と子どもは答えました。私は広島島の病院で、頭を通さずに、頑張っている自分もいい、頑張らない自分もいい、という風に自分を丸ごと受け入れることができました。無意識に。そして、子どもたちと向き合うときの向き合い方も変わっていたんですね。

自分を丸ごと受け入れた私は子どもとの姿も丸ごと受け入れていました。事件前の私は子どもたちがいろいろと愚痴を言ったり、いろんな話をしたときに、「ああ、それぐらいあなたがちよつと我慢すれば良かったんじゃない」「それぐらい社会に出たら当たり前だよ」。そう返していました。でも、事件後、子どもたちが話すとき、「そんなことがあったの。辛かったね。大変だったね」と子どもの気持ちを受け入れて、その気持ちを返している私がいちたんですね。本当に無意識に！子どもたちからお母さんが変わったと言われて、初めて頭で自分の変化に気づく私がありました。大人って不便ですよ。私は、生きていくためにいろんな鎧を着たり、常識を詰め込んで大人になりました。でも、そうではない大人の人もいっぱいいるように思います。柔らかい感性をもって大人になっているような方もいます。他方、私はそうではなく、いろんな鎧を着て自分を守るために頑張ってきた人間でした。でも、本当に大切にしていただけ経験の中で、それを脱ぎ捨てることが出来た

んですね。ありのままの自分で生きていいんだ、という感覚をいただきました。そこで、それまで鏡を着て閉じていた私の心も身体も、本当の意味で開かれました。このことは私の人生にとって、とてもありがたい経験でした。

事件前はいろんな講演の情報が入っても、正直なところ、「人の話を聞いてもしようがないんじゃない？」と思っっていました。なので、皆さんがこんな私の話を聞きに来てくださっていることに、私は、『凄いなー』と思うんですけども。ともかく、私の心が開けたので、その後は、いろんな面白そうだと思う講演を聴きに行くチャンスをいっぱい作っただけです。そういう中、村上和雄さんという方のご講演を聴きに行きました。ご存知の方もいらっしゃると思いますが、村上さんは、筑波大学の名誉教授で、遺伝子工学の先生です。遺伝子工学なんてわからないわかって思いながら、「すごくいいわよ」と勧められて聴きに行くと、本当に自分がどうして今、こうあるのかについてということが理解できたんですね。そこで、私が少年刑務所でも話している、村上さんの『生命のパカ力』という本の一部分を皆さんにお伝えしたいと思います。「『環境や経験の影響力』遺伝子のオンオフ機能をうまく活用するにはそれなりの要因が必要で。例えば末期がんを宣告された人たちがモンブラン登頂に挑戦したところ、免疫力が上昇したという実例があります。またがん患者に落語を聞かせたいに笑ってもらった後で免疫力を測定したら向上していたという臨床報告もあります」。これ

は最近また言われてましたね。「女性が恋をすると肌が美しくなるというのも、わくわくした気分が遺伝子をオンにして肌を美しくするホルモンを分泌するからだ、と考えられます。心の持ち方、つまり心が好ましい状態に置かれると、眠っていた遺伝子が目覚めるきっかけになることは、ほぼ間違いないでしょう。また、一般に悪いといわれているストレスも必ずマイナスにばかり作用するとは限りません。深い悲しみを経験したことが眠っていた良い遺伝子を目覚めさせる契機になることもありえます」と書いてあります。私はこの事件に遭うまでは、人前で話せるような私ではありませんでした。人の前に立つたら足ががくがくしたり、顔が赤くなったりするなど、あがり症の気の小さい人間だったんです。やはり、自分のいいところを見せたいからでしょうね。でも、この事件に遭っているんならここでお話が出来るようになったのは、「3%だけしか使われてなくて、九七%は眠っている」という私の遺伝子に、いろんな人との出会いとかいろんな境遇に遭遇することで、スイッチが入っていったからではないかと思えます。このような環境のお陰で、『私の遺伝子が、いっぱい目覚めてくれたんだ』ということに気づいて、嬉しくなりました。私自身の自己改革がこの事件によって出来ていったんですね。

そのような時に、少年の両親が謝罪に来られた後、少年、そして少年の両親との間で示談書を交わしました。その示談書の中に、私は、『もし少年が会ってくれるなら会いたい』と入れ

てもらいました。それを書いてもらったからかどうかはわかりませんが、彼は京都の医療少年院に入っていて、医療少年院の方から私に面会の打診がありました。その院長先生は収容されている少年と被害者を会わせる教育をされていて、これは加害少年にも被害者にもグリーンフケアになるという実感をお持ちの方です。私が関西方面で話す時に何度か聴きに來られ、私とその少年を会わせることが彼の更生に役立つという判断をされたようでした。結局、少年とは三回面会しました。一回目は少年が入っている医療少年院に面会に行きました。私は、彼の担当であろう教官の方たちと一緒に並んで待っているところに少年が別の教官に連れられて入ってきて、深々とこうべを垂れ謝ってくれました。それはほんとに自分の中心から謝ってくれたな」ということが私には伝わりました。私が「謝ってくれた」と話すと、「それは本当に心からのものだったんですか？」と聞かれたりするんですけど、謝るといふ行為が本当に心からのものなのか、ただ形だけのものなのかは伝わるんですね。私は、彼は心から謝ってくれたと感じました。そして、彼の背中をさすりながら、まず伝えたかった「これまで誰からも理解してもらえなくて辛かったね」と言いながら、彼のつらさを感じて涙が溢れてきました。私は娘に対する失敗があったから、彼が辛いんだってことが共感出来た部分があったので、それを伝えたくて少年院に行きました。そして、「でもこれで許したわけじゃない。許すのはこれからです。これからの生き方を見

てるから」と伝えました。

その後、少年から手紙が届きました。そこには、『私のことを思っただけ泣いてくださった時、自分の罪深さと温かい思いが同時に沸き起こりました』と書いてあり、共感できた時に、彼もそれを受け取って自分の力にしてくれたのかな」と思っ、非常に嬉しかったです。次に、二回目の時は少年と二人だけで会う時間を、ちょっとだけだったんですが作っていただきました。その時、少年は、私に本音を話してくれました。本音なので皆さんには伝えられませんが、彼が私を信頼してくれたと思っ嬉しかったです。この二回目の時に、「どうしてこういう事件を起こしてしまったのか考えてほしい」とお願いしました。考えるということでしたか自分を振り返りませんか、私は絶対考えてほしいと思っっていました。

三回目は少年が佐賀まで連れてこられて、塚本さんのお墓参りをした後に会ったんです。少年は一言もしゃべることが出来ませんでした。時間が経つということ、被害者にとつても加害者にとつてもありがたいことだと思っます。それは、人は時間と共に物事を忘れることができるからです。少年院では社会に出てからの教育がなされて、少年は出院してから先のことを考えていたのではないかなと思っます。お墓参りをするという現実を突きつけられた時に、この中に眠っている人を自分は殺めてしまったという感情が沸き起こり、何も話せなくなっと思っます。それは人として当然の感情の動きだと思っ、何も

話せない少年と私はその時は別れました。その後、少年から手紙が届いて、どうして自分が事件を起こしてしまったのかということが書いてあり、少年が考えを巡らして返事をくれ、約束を守ってくれたことが伝わって、少年院の育てなおしの中で彼は確実に変わっていったということを感じました。

本当は、少年と被害者が会うということは殆ど無いと思うんですね。というのも、少年と会う前に、少年院の先生から、少年はこんな風に学んでいますってことを、何度か伝えに来てくれています、その時に、その先生から、「院長先生は自分のクビをかけて彼と面会させたいですよ」ということも教えてもらいました。

私は二〇〇〇年の少年法改正を審議している国会に参考人として被害者と呼ばれました。もう一人は少年犯罪被害者の会代表の方で賛成という立場でお話をされ、私は、厳罰化反対という立場でお話をしました。

その少年犯罪被害者の会代表の方は、次のようなお話をされました。ご自分の高校生だった息子さんが、他校の生徒から集団で暴行されて、結局亡くなりました。その暴行をした少年たちは「あいつが手を出したから自分たちはやった」みたいなことを主張したけれども、我が子はそんなことする子ではないし、手を見たらとつてもきれいな手だった。しかし、自分の子どもは死んでしまっているから何も言えなかった。その少年たちは一年か二年、三年くらいで少年院から出てくるが、自分の

子どもは死んでいるのに線香一本上げに来ない。親も謝りにも来ない。そういう少年たちはちゃんと罰してほしい、と。

そこで、私は、もしわが子がそういう状況で殺されたときにこんなこと言えるんだろうか、と非常に怯みました。私は何のメモもなく話すのが怖くて、予め話す内容を書いて国会に行っていたんですね。書いていて良かったと思いました。そして、彼女は彼女の立場で話す、私は私が経験したことを話すしかない、という腹を決めてその文章を読みました。そういう経緯もあり、どうしてあの少年犯罪被害者の会代表の方がこんな風に思われるのかということを考えました。その方の場合、少年たちやその親が謝ってもいけない、お線香一本上げに来ない、という状況なんですね。私は少年の両親から謝ってもらいました。本人からも謝ってもらいました。これは物凄い差なんですよ。本当に謝ってもらうということが、一つのグリーフケアになるってことが、修復的司法のハワード・ゼアさんの本にも書いてありました。被害者が赦す後押しになるということです。ですから、私がこんなことを言えるのは、少年やその両親が私に謝ってくれたということがあってのことだとも思います。

加えて、ここで、この事件で亡くなられた塚本さんのことを少しお話ししたいと思います。塚本さんは小学校の先生を二八年されていきました。しかし、『今の学校教育は絶対子どもたちの側に立っていない。もつと子どもたちの意見を大切にして私は教育したいけれども、それが今の学校では出来ない』のと同じ

に、「保護者の多くも、子どもが学校に通うようになると、学校の成績しか気にしない。だから、学校に入る前の親子に向き合うしかない」という思いを持つようになられました。そこで、塚本さんは、モンテッソーリという北九州にある教員養成施設に半年通われ、小学校の先生を辞めてから幼児室を開設して、主催していらっしやいました。私はそこで塚本さんとお会いしたんですけれども、塚本さんは思いを共有するのが好きな先生で、幼児室で起こったこと、社会の状況、そういうことを毎週「幼児室たより」として保護者の方に配っておられました。塚本さんが亡くなられた後に、ご主人と息子さんがそのおたよりから抜粋して『お母さんわが子の成長が見えますか』という本を出されたんですね。今は絶版になっていますが、アマゾンで買えますので、よかつたら読んでください。その本に、非常に興味深い文があるのでそれも読ませてもらいます。「中学生の暴行によって教師が死亡するという事件がありました。報道によればその中学生は、家庭では、父親思いの優しい子だったということでした。私は事件後のその中学生の心中を察して胸が痛む思いです。一人の中学生を窮地に追い込んだ教育環境が残念でなりません。」このように本当に子どもの側に立つて考えてくださる先生だったのです。もう一つご紹介しますと、このバスジャック事件の二、三日前に、愛知の方で「人を殺す経験がなかった」と言って、おばあちゃんを殺した高校生がいます。塚本さんはその事件について、「こんな子どもたち

が育つのは大人の責任だよ。特に教師である我々の責任だ」という趣旨のことをおっしゃっていました。そんな先生でしたので、私もいろんな場で（塚本さんのことを）お話しすることが出来ているんですね。それでも、私が少年を擁護するようなことを言っているのは、ご遺族を苦しめると思っています。

私は亡くなられた塚本さん宅に、お盆と、お正月と祥月命日と年三回、毎年お参りさせて頂いていました。去年、つまり事件から一八年目にテレビの取材がありました。私は映像では出たくないとお断りして電話だけでしたが、塚本さんのご長男が取材を受けられたと番組のディレクターから聞きました。そこで、お参りに伺ったとき息子さんに「塚本さんテレビに出たの？」と聞いたら、「うん、出たよ。言いたいことがあったから」とおっしゃって、そこから初めて事件のこと、塚本さんのことをお話しすることが出来ました。御遺族の方が事件のことをお話しできるようにするにはそれだけの時間がかかるのだと思います。ただ、塚本さんの息子さんは、芸術家（絵描きさん）で、私は、彼はこの苦しみをきつと芸術に昇華できるという確信があったので、『私が事件について、加害少年を擁護するよいうな話をするのは被害者遺族にとつてとてもつらかっただろう』と思いましたが、ずつと語り続ける事が出来ました。しかし、お参りに行くのは辛かったです。息子さんは辛い表情をしてらっしゃるんですね（当然ですが…）。でも、彼を本当に信頼

していたのでお参りに行くことが出来ました。そして、一二年経った頃「山口さんもうお参りに来んよよかよ」と言ってくださいました。でも、「私はあなたたちの為じゃなくて、自分のために来ているんだから、ごめん、来させて」とお願いして、今も伺っています。人が突然亡くなるってことは、家族にとつて本当に大変なことですよ。塚本さんの息子さんは、事件ではなくて事故で亡くなったと思っていると、おっしゃっていました。そして、私は参議院の法務委員会に呼ばれたのですけれども、彼も衆議院の方に呼ばれて、講演をされました。そこでは、「加害少年がずつと募参りに来て、僕が『もういいよ』と言うまで来てくれたら、僕の心はどうにか収まりがつくかもしれない」と発言されたことが当時の新聞に載っていました。少年本人にそういう意志があればいいのですが、今の法律ではそんなことを加害少年にさせることはできないんですよ。しかし、時間とともにご遺族のところが安らかになっていかれてるということは、私にとつても非常にありがたいことです。生きていけばいろいろなことがあるけどそれと向き合ひながら（向き合ひたくない時は向き合わなくていいと思います）、今の自分ができることを精一杯やっていくことが大切なのだと思います。

被害者として、今日は、お話をさせてもらいましたが、少年法のことも気になっています。今また、民法の成年年齢を下げたことで少年法の適用年齢が二〇歳から一八歳に下がろうとし

ています。大変なことだなと思います。少年院に入っている一八、一九歳の非行少年が一番多いと聞いています。入院者の半分くらいだそうですね。そして、少年院で育て直しをしてもらうことが大事です。それは、事件を起こす子たちの中には、虐待や暴力など様々な被害に遭っている子たち、言い換えると、人が育つのに必要な愛着に歪みがあったり、自分の思いや考えを大人に聴いてもらえず大人を信頼できなくなった子たちが多いからです。バスジャックの少年の子育てについて、家庭裁判所の意見書に「実態を見据えての子育てというよりは、保護者の願う子ども像や家庭像を優先させたものとなっている。それが少年にとつて心理的な負担となった」と書かれていたと新聞で読みました。そういう家庭状況の中で育ってきた子どもたちには、もう一回、人としてちゃんと尊重してくれる大人と出会うことが大事ではないかなと思います。話があつちこつちに飛んで聞きづらかったと思います。ごめんなさい。では、そろそろ時間になったので、一応これで終わります。

（拍手）

岡田…ありがとうございます。今日、今、少年法の話を最後にしていただけですけども、高松家庭裁判所で長く家庭裁判所調査官としてお勤めだった、廣田邦義さんに今日この場に来ていただいています。私が事前に、バスジャック事件

の被害者の山口さんがお話をされると廣田さんにお伝えしたところ、ぜひお話を聴きに來たいということで、熊本までいらしてくださいました。こうした事情もありますので、簡単に結構ですので、コメントを頂戴できればと思います。よろしくお願ひします。

廣田…貴重なお話をありがとうございます。廣田と申します。家庭裁判所調査官という仕事を三八年やりまして、今はスクールカウンセラーとして小、中、高専で子どもたちと関わっています。それから、四国学院大学で犯罪心理学の講座を担当しています。山口さんのお話を前々からお聴きしたかったです。なぜ、そんなに聴きたいのかと言いますと、一人の少年に深く、長く付き合ひ、「事例から学ぶ」ことが私のテーマだからです。家庭裁判所調査官は三年程度で転勤を繰り返します。ひとつの事例に長く関わることはむづかしいのが実情です。それで、ある小さな裁判所で二十数年、異動せずに働いたんですが、深く長く付き合う事例というのは極めて稀でした。山口さんのように深く長く付き合う中で少年との信頼関係が出来て、初めて事例の本質というものが、見えてくることを教えていただきました。例えば、動機です。重大事件になるほど、事件直後に調査した動機と数年後に再度調査したときの動機とはかなり異なる場合があります。おそらく、事件を起こした少年自身、事件直後は何もわからないのではないのでしょうか。非行・

犯罪は推理小説のような計画的な犯行は例外で、心理的に追いつまされた状態で何もわからないまま起こしているように事例が多いと思われまます。ですから事件後、自らの非行と向き合う体験を通して真の動機が見えてくるのかもれません。最近の少年司法では、AI、つまり、人工知能的な発想で、どれだけの非行の要因があつて、どの程度の犯罪危険性があるかといったような考え方が主流です。いわば「非行の原因論」重視の立場です。私は原因論も大切ですが、もっと大切なことは非行からの回復をどのように援助すればよいかという「処遇論」だと考え、それを重視しています。そのためには事例と長期間関わらなければなりません。そうすると、再非行や問題行動が必ず出るので、これらと向き合う体験を通して初めて少年との関わり方のヒントが得られると思います。私も含めて専門家と言われている人間は、専門用語はたくさん知っていますが、果たして事例の本質に迫っているのかいつも疑問を感じています。専門用語で事例の説明は出来ませんが、原因論ばかりで処遇論まで到達していないのです。我々実務家は、評論家と違って、目の前に少年がいるので、「次の一手」が重要です。少し勉強すれば、事例の分析はできるようになりますが、次の一手は本当に少年に関わった体験がないとむづかしいのではないかと思います。今日、事例の本質とは何かを山口さんから教えていただいたわけですが、私にもずっと付き合っている元少年やその家族がいます。彼らから教えてもらったことが、私の原点になっています。

ます。例えば不登校であれば、どのタイミングで本人に登校刺激をするか。保護者に何を伝えるか。非行ならば、この少年の非行のピークは今か、それとも数年先か。少年鑑別所や少年院などの施設にお願いする必要があるかどうか。この見立てが非常に難しいわけです。今までの事例から教えてもらった体験を総動員して考えます。

最後になりましたが、現在、少年法改正で年齢引き下げがテーマになっています。ある意味、戦後の家庭裁判所や少年院教育そのものが問われています。そのような中で、私の地元の四国少年院で新しい動きが見られます。少年院在院中の段階で、退院後、どのような援助をするかについて各関係機関が集まり、ケース会議が行われるようになりました。四国少年院の呼びかけに応じて少年に関わってこられた各機関の担当者ばかりが集まるケース会議です。そこでは、被害に遭われた方も含めて、この少年と家族にどういう支援ができるかを具体的に議論します。その中で見えてきたものは、担当者同士は連携しやすく、この連携こそが処遇論のキーワードであることです。そしてもう一つ「加害者の中の被害者感情」の重要性です。これは山口さんのお話の大きな柱だと思います。加害者というと、悪いことをした人だと捉えがちですが、加害者をよく見てみると、その人の中に虐待やいじめを受けた被害者感情があります。今日お話しいただいた少年もいじめを受けていたという事実は彼の中の大きな被害者感情だと思っています。ここにスポッ

トを当てないと、やはり少年との関わりというのはできないなあということを改めて教えていただきました。ありがとうございました。

(拍手)

岡田・廣田さんは、私の講義でしょっちゅう出てくる、高松の調査官なんです。私の話のネタ元と言ってもいい方なんです。実は、今日は他にも多数の、少年事件などに関わりがあるという方たちにお出でいただいております。学生の皆さんも含めて、他の方のご質問やご意見も承りたいと思います。いかがでしょうか。遠慮なくどうぞ。

Aさん…「福岡市から来ました。Aと申します。会社員です。私は先日の土曜日、福岡市で虐待サバイバーの方たちもいらっしやる集まりに参加してきました。親に虐待されたケースの子たちがいると聞くと、ちょっと怖かったです。議論を聴いていますと、当然、親とは全く信頼関係がないし、はっきり言って「そういう親は見捨ててください。そうせざるを得ない。家に帰ると一〇〇パーセント、本当にもう命が危ない」とか、そういう状態なんです。サバイバーの方がサバイバーを癒さなければいけないというような状況です。ただ、そうは言いつつも、終わった後の懇親会に行くと、その方たちの間で採めた

りするんですね。ですから、全く素人の私はもう見ているしかなかったという状況でした。喧嘩を止めるぐらいなら介入はしますけれども。そこで、そうだった、かなりきつい状態の方たちに関わる、何かヒントになるようなことがあれば教えていただければと思います。

山口…喧嘩することも大事なことだと思いますが、とりあえず、私はそのような集団ではなくて、一人一人の話を聞くことから始めないといけないのかなあと思っていますね。それも、否定せずに。間髪入れないで。ただただ聞いて、そうだったね、そうだったね、と言って。もう、それしかないのかなと今は思います。その方が楽しかったと言えば、良かったねと。辛いことだったら、辛かったねと返してあげる。私の尊敬する、渡辺位（たかし）さん（児童精神科医）から、子どもの「しあわせ」とは、「子どもの気持ちと子どもの気持ちとできる大人との出会いである」とお聴きして、子どもの気持ちをどうにかしようとするのではなく、その気持ちをそのまま認めていく大人との出会いが大事だと教えて頂きました。大人も子どももそこは同じではないかなと考えますが…。

私は、現在、不登校の子の居場所作りに取り組んでいます。要するに、この事件の少年が不登校だったこともありですが、それ以上に、うちの子も不登校で、私は自分の家庭に子どもの居場所を作れなかったという、この懺悔の気持ちもあり、二度

とそういう少年を出さないためにも、そういう子どもたちの居場所が必要だと思い、とりあえず家庭が居場所になればいいと思います。不登校の子どもを持つ親の会を始めました。一年後、不登校の子が集まれる居場所を開いたのですが、居場所を開いて二〜三年ぐらいいは、親の会が絶対に必要だと思っていましたね。それは不登校の子どもにとつて、家庭と私たちが開いている居場所とが成長の両輪だと思っていたからです。けれども、今は、片親だったり、精神を病んでいたたり、発達障がいを抱えていたり、という親の子どもたちが参加するようになりました。私たちの居場所は週二回しか開きませんが、そんな中でも子どもたちが変わっていくんですね。来てくれる子どもや親を否定しない。ただいるだけでいいというか、その子がいて楽しいと思ってくれればと思っています。よほど悪いことをすれば別ですけれども、それも一緒に考えるというように。ご飯を一緒に食べるといふことも大事にしています。ご飯を作りたい子は一緒に作ればいいし、作りたくない子はご飯が出来た頃に食べたいし、みたいなやり方です。来る時間も自分の自由。帰る時間だけは青少年センターを借りているので、「何時までよ」と言って帰ってもらいますけれども。二、三年で確実に変わっていくんですね。発達障がいのある子どもでも本来に変わります。私は、親が変わらないと無理だと言いましたけれども、親は変わらなくても子どもだけでも変わっていくんですよ。信頼できる大人との関わりができて、自分がここに居ていいんだ

という場所さえちゃんと見つければ。だから、そういう子たちのためにも、そういう居場所を作って、子どもたちが安心して過ごせて、どんなことをしゃべっても、こんな悪いことをしたと言っても、そんな悪いことをしたねと責めることをせずに、ただただ子どもの話を聞くことが大切なんです。言っている本人が悪いとわかっているんですから。それを悪いっていうからおかしくなるので、ただ聞くだけで、そうだった、そうだったと受け入れるという場があればと思います。集団でもいいかもしれませんが、少人数でのミーティングの場とかもあるといいのではないのでしょうか。でもどちらかと言えば、一人二人くらいで話を聞いた方がいいかもしれません。ちょっと答えになるかわかりません。ありがとうございます。

Aさん…ありがとうございます。

Bさん…今日はありがとうございます。Bと申します。私は、保護司と刑務所の篤志面接員とを務めています。現在は熊本家庭裁判所の少年友の会で付添人をやらせてもらっています。非常に素晴らしいお話をおうかがいできて、今日はありがとうございます。

先ほど、少年には三回会われて、三回目に彼は何も言わなかったとおっしゃいました。私が、今、付添人している少年は一四歳です。一年間、遠くの児童自立支援施設に入っており

ました。こちらに帰ってきて、しばらくは良かったのですが、でも、それから半年くらいして再び非行に走ったということで、二度目の付添人活動をやっているところです。最初は、その少年は、「うんうん」「～をしたい」「鑑別所から帰りたい」というだけで、他には何も言わない。そこで、やはり、その少年から一生懸命聞き出そうとして、「あなたがこれからやりたいことを何も言わなかったら、やりたい方向には行けないよ」とちょっと脅して、「審判ではちゃんと自分の希望を言葉で伝えないと伝わらないんじゃないかなあ」などと言って、ようやく他の言葉をちよつとずつ発するようになり、審判の時も、ちゃんと自分の言葉で言えるようになったんです。審判の結果、試験観察という形になりました。少年の様子を観察しながら、時折面接をやっていると、また、何も言わなくなってしまったんですね。そこで、また、少し話す機会や時間を取りたいなあとは考えているのですが、さつき三度目に何も言わなかったとおっしゃった、その後の少年はどのような態度だったのか、何か言葉を発してくれたのか、雰囲気とか、わかりましたら教えてくださいいただけますと幸いです。

山口…本件の少年のことではないのですが、実は、私が開設している不登校の子どもたちの居場所には、大人との信頼関係を崩されてしまっている子がいました。その子は小学二年から学校に行けなくなつて、うちの居場所には四年生ぐらいの時に

来てくれたと思いますが、一年ぐらいいは何も話せませんでした。でも、居場所の仲間であっているバドミントンだけに毎回やってきました。このお子さんは、口が利けないのかなど私は正直思うくらい、何も話してくれませんでした。こちらが、おはようと言つても、黙って私の前を通り過ぎていきました。でも、彼が私を信頼してくれたときに話せるようになりました(どこで信頼してくれたかはわかりませんが)。つまり、しゃべってくれない少年がしゃべれるようになるには、信頼関係が必要で、それを築くには時間がかかるのだと思います。ただ、家庭裁判所での手続の場合、時間がそうないでしょうから、そこが問題だとは思いません。

Bさん..そこ、そこですね。一番問題だと思えます。

山口..でもね、何も話さなくてもね、その審判で少年が言葉が発したことは褒められましたか？

Bさん..それはもう、褒めました。

山口..そうですね。

Bさん..はい。言えてよかったね。あなたがそれをしてくれたから、こういう形になれたんだよって言いました。やはり言

葉で発しないと、なかなか伝わらないですね。お互いに。刑務所で篤志面接員として面接していると、初めて刑務所に入った人でも少年院を経験している人が多いです。刑務所は初めてと言っても、既に少年院を経験しているので、「なんで刑務所に入るようになったの？」と、面接で限られた短い時間で聞き出さないといけないので、大変です。極力、受刑者である自分が歩んでこられたところを聞き出そうとすると、そういう少年院での経験があるので長くなります。そのときに、今日、山口さんからおうかがいした、医療少年院での山口さんと少年との間であったような出会いみたいなことがあればいいのです。少年院は教育する場と言うんですけれども、なかなかそんなところまでは行き着いていないと感じることが少なくありません。少年院から仮退院してきた少年に保護司として保護観察で関わる場合には、少年院には二度と行きたくないという少年は更生に繋がりますが、話をしてくれない少年の話を聴くのと、信頼関係を築くのはとても難しいんですけれども。

山口..そうした方々は、多分、聞いた言葉に的確に言葉で応答する能力が十分に育っていない方々だと思えます。そういう方々ほど言葉ではなく、つい手を出してしまう場合が多いので。だから、できたら、失礼かもしれませんが、私は孫がいるおばあちゃんですとか自己紹介した上で、色々な経験をしてきたけれども、自分のいいところではなくて、失敗したこ

とかを話せたら、意外と少年も話してくれるかもしれません。もちろん、何も話さないかもしれないけれども、こちらが「今日はおばちゃんの話聞いてくれてありがとうとね」とだけ言って、少年が帰っていかれてもいいかもしれません。

実は、私も、意外と話すのが苦手で、自分に自信がない分、話しづらいですよ。そういう中で、塚本さんと話していると、塚本さんは自分のやってきたことを私にすつとしゃべられるんですね。ご自分に都合のいいことも悪いことも、お姑さんとこんなことがあったのよ、嫌だったのよ、とかも話して下さったことで、私はこの人から信頼されているという気持ちになり、はじめて自分に自信が持てるようになりました。私もそうなんですけど、自信がない子は自分のことを話しづらと思うんですよ。だから、良かったら、自分のいろんなことかを、ちょっとおばちゃんの話聞いてくれる？とか言って、少年に話してもいいかもしれないと思います。これは、私の思いつきですが。

Bさん…ありがとうございます。

Cさん…私は、福祉の仕事をしながら、大学院で学んでいて、岡田先生の授業等を受けております。ここ最近ですね、大きな事件で言いますと、例えば川崎の無差別殺人事件だったり、あとは新幹線の事件だったり、西鉄のバスジャックの事件と同じような背景を抱えた事件がまた最近増えてるなあと感じてお

ります。福祉の仕事をしていることもあって、やはり、引きこもりなどの家庭の問題ということにも関心を持っていますけれども、こういった孤立も含めた世の中の問題全体を改善できていないという現実がある中で、ちょっと大きな話になるんですけども、今後、どういった形で一人一人が考えて動いていけば良いか、こういった悲劇をなくしていくにはどうすれば良いかという点について、お考えがあればちょっと聞かせていただきたいと思います。

山口…ありがとうございます。私はそんな大それた人間ではないので、そこまで言えるかどうかはわからないですけども。ただ、私は、やはり自分が変わらなないとしようがないと思っています。周りを変えようなんてとんでもない。ただ、私はどう変わるかと言えば、自分を丸ごと、どんな自分でもOKだと、自分を受け入れたときに、周りのいろんな人を受け入れられるようになるんじゃないかなあと思うんですね。だから、誰も責めないことが大切だと思います。

うちの子どもも不登校で、引きこもりもやっていた時期があったんです。引きこもりのお子さんを抱えているお母さんが、親の会に参加されたのですが、「うちの子は着替えもしないで、一日中寝巻のままです。私は情けなくて」と嘆かれたときに、「そうなんです。一日着替えられないんですね。私も事件後、着替えるなんてこと考えられなかった。それぐらい

辛い状況をお嬢さん生きてらっしゃるんじゃないんですか」とお返ししたことがあります。そして、他の参加者からも、「そうだ。うちの子も一日中替えない時があったわ」という話がありました。我が子が不登校・引きこもりになったら、親自身が辛いんですよ。本当は子どもが一番辛いんだけど、親は親で辛くなつて、それを受け入れられずに、苦しんでいる。そのような時、私のそういう状況を聞き、他の親から、うちの子もそうだったって聞かれた時に、そのお母さんも初めて子どもさんの思いに気づかれたんだと思います。それで、帰る途中に涙が溢れてどうしようもなかったそうです。そのお母さんは、家に着いて、気持ちを整えてから、「ただいま」と言ったら、それまで一度も出て来ず、「おかえりなさい」も言ってもくれなかった子どもさんが、二階から降りてきて、「おかえりなさい」と言ってくれたそうです。ただ、「ただいま」の声を聞いただけで、子どもさんはお母さんのこころの変容に気づかれたのです。そういうことだと思えます。だから、こちらが、自分の思いの外に出る（同一性の外に出ること）とともに、自分の思いを空にして相手と向き合おうとすることが大切だと思います。そう言いながらも、相手の気持ちに、そのままにはなれないですよ。わからない。相手の気持ちはわからないという前提に立ちながら、わかろうとすることが大事ななあと思います。だからまずは、自分を見る。自分がどこに立っているのか。そして、その人とう向き合っているのか。そこからしか、世の中

は変わっていかないのかなあと思っています。

ですから、例えば、私の話をここで聞いてくださった人が一人でもそういう自分に気づいて、相手の気持ちはわからないという前提に立ちながら、しかし、相手をわかろうとする人になってくださったら、少しずつ世の中は変わっていくのかなあという希望を持っています。世の中みんな変えるなんて、とてもじゃないですけれども、私は今、そうやって、いろんな人と出会いたいなと思っています。ただ、人間でするので、こうしたらいいのにとか思ったりします。でも、なるべくそういう思いは、頭から消して向き合うようにして、今の状況はこの人の生きている状態だと受け入れながらお話しするようにしています。お答えになっているかはちょっとわかりませんが、ありがとうございます。

Cさん…参考になります。ありがとうございます。

山口…ご質問がないようでしたら、少年院の子どもたちの感想文を読ませてもらっていいですか。私が講演に行った時の感想文です。これは少女からのものです。「何よりも一言で言うと、救われた、という気持ちでした。愛されたいってずっと願ってきた。その気持ちがなんでもわかってくれるんだらうって。わかってくれる人がいたことが本当に嬉しくて仕方なかった。愛されたくて必死だった。なんだってチャレンジして身につけ

て、認めてもらいたくて。でも、一度だって褒めてもらえなくて。もっともってって言われるたび、私は自分を責めた。なんでもさんのよ、とか。愛されたいって願うことがわがままなのか、とか。自分を責めることしかできなかった。大人にはわからないと正直思っていた。こんなに必死にもがいても、何かのせいにしてはダメ。愛されていないことはないってみんな言うから、そうだって自分に言い聞かすことしかできなかった。この気持ちが少しでもわかってくれる人と出会えたことで私はやっぱり、頑張ろうと思えました。」こういう感想文を書いてくれた少年院の子がいました。私は彼女に共感したわけじゃない、バスジャック事件の少年の気持ちが辛かったろうなあと話したことが、このように伝わっていくという、そういう感性を持った少女だったんですね。だから、事件を起こすもつと前に出会ってたら、素晴らしく育っていかれたんじゃないかなあと思います。

追記

本稿は、岡田が担当した特殊講義Ⅱ（少年法）に、非常勤講師として二〇一九年一月三日にご出講いただいた山口由美子さんの御講演をまとめたものである。

本稿は、少年による重大事件の被害者による意見表明であり、それ自体、数が極めて少ないこともあって、貴重である。これから、私たちは多くを学ぶことができるように思われる。

まず、重大事件の被害者にとって必要なものの一つが、他者が被害者の重大な被害を辛かったこととして共有することである。山口さんにとっては、医師からの「大変だったですねー、お辛かったですよ」という言葉がそれにあたる。また、亡くなられた方の御遺族から山口さんの生を良かったと受け止めてもらえ、大切にされた経験が、山口さんが生きていく力になった旨のお話からも、被害者が周囲から大事にされることの重要性が示されている。

二つ目に、このように山口さんが周囲から大事にされたことが、山口さんが他者を丸ごと受け入れるようになったことにつながっている点である。それを山口さんは、着ていた「鎧」を脱ぐという形で表現されている。そして、このことが、山口さんが少年と会って、少年の謝罪を受容したことにつながっているのではないかと思われる。言い換えると、このように被害者が周囲から大事にされ、他者を丸ごと受け入れられるようになることを通して、初めて、少年と被害者との関係づくりが始まるのではないか。

加えて、このことは、山口さんと少年との関係がより深いものとなったことともつながりがあるように思われる。確かに、山口さんは、被害に遭う前に、お子さんの不登校に直面し、同

じく不登校の経験を持つ少年を理解できる素地があったことは否定できない。しかし、山口さんが「鎧」を脱ぎ捨てられたからこそ、「これまで誰からも理解してもらえなくて辛かったね」という事件後の少年への初めての声掛けに繋がりが、そこから少年が山口さんに本音を話せるようになる関係に至ったと考えるべきではなからうか。¹⁾

三つ目に、山口さんの涙が少年の変化を生じさせたことから明らかのように、非行少年の立ち直りにとって重要なことは、必ずしも非難ではないという点である。むしろ、山口さんが少年との最初の面会の折に流した涙が、少年に自己の罪深さと同時に温かい思いを生じさせた旨が手紙で伝えられたというエピソードからは、非行少年の立ち直りにとって重要なものは、少年が背負わされてきた重荷に、他者が共感し、少年を承認することではないかと思われる。²⁾ そうすると、様々な被害を受けて事件に至った非行少年が立ち直る上で必要なことは、非難を中核とする刑事罰や処分ではないことが帰結されるのではなからうか。

最後に、山口さんのお話からは、少年の両親にも様々な被害が及んでいる現実を知ることができる。たとえ、両親による少年の養育に不適切な点があったにしても、少年の両親に法を超えるパッシングが加えられることに正当性はない。このようなパッシングが少年の立ち直りを困難にする側面にも、私たちは思いを致す必要がある。³⁾

なお、この御講演とその後の質疑応答の反訳については、熊本大学法学部四年生の木村嘉那さん、森川真帆さん、森田結衣さんにご尽力いただいた。記して謝意を表したい。

最後に、当日ご参加いただいた廣田邦義元家庭裁判所調査官を始めとする聴講者の皆様、及び、山口由美子さんに、改めて心より御礼申し上げる次第である。

註

(1) 加害者と犯罪被害者の関係を修復しようとする取組みの重要性が長らく説かれてきた。しかし、山口さんのお話からは、その大前提として、被害者ないしそのご遺族が周囲から大切にされることが必要不可欠であって、しかも、そこから犯罪被害者ないしそのご遺族が山口さんのように「鎧」を脱ぎ捨てられるようになるには、相当長期の時間がかかることも示唆されるように思われる。刑事司法や少年司法の枠組みでは、被害者やそのご遺族が「鎧」を脱ぎ捨てられるようになるには、あまりにも時間が足りなすぎるのではなからうか。ここに、いわゆる修復的司法の限界があると言えよう。

(2) 犯罪を繰り返してきた者がいかにして犯罪のキャリアから離脱したのかに注目する、離脱研究に取り組んだシャッド・マルナは、犯罪者が犯罪を止めるきっかけとなる重要な出来事として、誰かが元犯罪者を信じてくれ、この元犯

- 罪者に、本当は、自分には自分なりの価値があると気づかせてくれることである旨指摘している。シャッド・マルナ（津富宏・河野莊子監訳）『犯罪からの離脱と「人生のやり直し」』（明石書店・二〇一三年）一三五頁参照。
- (3) 非行少年の家族が、事件後どのようなバッシングに遭い、困難を背負わされているかについては、阿部恭子編『少年事件加害者家族支援の理論と実践』（現代人文社・二〇二〇年）二六頁以下参照。